

亡き母が闘病中に描いた絵日記

いじめ防止 勇気と希望を

いじめを防ぐために学校で朗読活動をしている作家のヒロコ・ムトーさん(六六)＝横浜市港北区、本名・相沢絃子＝は、二〇〇六年に亡くなった母が闘病中に描いた絵日記をまとめた「雲日記」(海竜社)を出版した。大腸がんや緑内障など、複数の病気にかかっても前向きに生きた母の姿を紹介することで、「心の持ちようで幸せを感じるようになる」と、学校で読み聞かせするつもりだ。

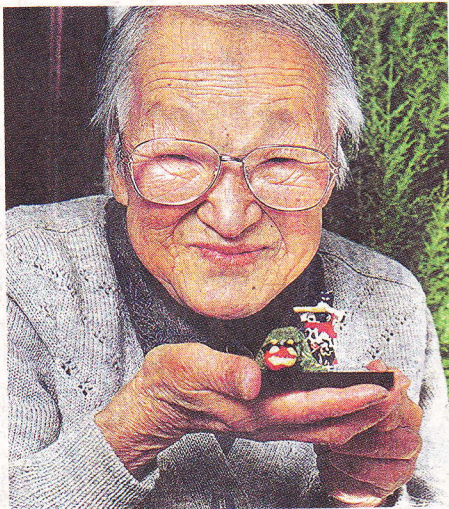
(志村彰太)

作家のヒロコ・ムトーさん出版

ムトーさんの母・武藤正子さんは六十九歳の時、緑内障で右目の視力を失った。左目も白内障だったが、翌年にバステル画を習い始め、七十六歳で初個展を開くまでに上達。かしその十年後、腸閉塞や大腸がん、肺水腫



ヒロコ・ムトーさん



闘病中に絵日記を描き続けた武藤正子さん＝ヒロコ・ムトーさん提供

などを相次いで患い、入退院を繰り返して九十三歳で他界した。多くの病気を抱えながらも、絵画や小さな紙人形づくりを趣味として続け、亡くなる一年前にはフランスのパリ日本文化会館で招待展を開いた。

ムトーさんは、正子さんの遺品を整理した際、四十九枚のはがきに描かれた絵日記を見つけた。そこで初めて、母が自宅療養していた一九九九～二〇〇〇年の通算約六カ月

間、ベッドから見える景色をひそかに描いていたことを知った。絵日記は主に水彩画

で、夕焼けが描かれていたが、それぞれが全く違う色使いだった。同じ西側の窓から見える同じような空でも、正子さんの目には毎日違つて見えた。「これから毎日夏の空が描ける楽しみを感謝します」。闘病中でも、前

向きな言葉がつづられていた。

はがきに描かれていた絵日記は、残されたムトーさんに向けた手紙のように思えた。「この日記は、勇気と希望を与えてくれる」と感じ、二十五枚を選んで出版を決めた。

ムトーさんは米国留学の経験があり、二人の娘は帰国後、「英語が話せる」などの理由でいじめに遭つたことがある。〇七年から、いじめを乗り越えた娘や、母を描いた自著二冊を小中学校で読み聞かせる活動「心の宅急便」を始めた。

「いじめはダメ」と直接訴えるのではなく、「人は何をされたら傷つくのか」を気づいてもらうのが目的。ハーブの音色に乗せて家族愛や友情の大切さを伝えている。

雲日記は新書サイズで六十四ページ。ムトーさんの解説も添えた。ムトーさんは「これを読めば、苦しんでいる人も『自分は捨てたもんじゃない』と思えるはず」と話している。

学校で読み聞かせたい

